

+

2021年

9月第1・2週の主日礼拝説教要約

・9月 5日：マルコ福音書9：20-29.

「信じることと祈ること」

・9月12日：マタイ福音書17：24-27.

「躓かせぬために」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

同行した3人の弟子たちと一緒に山を下りると、地上の弟子たちを取り囲む大勢の群衆がいて、さらに律法学者も介入して何かを論じ合っており、議論は暗礁に乗り上げている様子でした。

イエスが不在の間に、その場に連れて来られた少年に対する治療のあり方が議論されていたのです。他にも、弟子たちが二人一組で、癒しと宣教のために派遣されたという事実が確認できるので、彼らの単独行動も部分的には解禁されていたようです。

後からその場に到着した4人の中にイエスの姿を見付けた群衆は、紛糾している議論の正しい答えを求めて駆け寄ります。すると、イエスは彼らに問い質します、「何を論じ合っているのか？」と。

群衆の1人が口を開きます。「先生、息子が聾啞の霊に取り憑かれており、辺り構わず引き摺り回し、引き裂き、泡を吹き齒軋りして気絶するので、憑霊を追い出してください。」と。事前に、イエスの弟子にも依頼してみたのだというのです。

古代の医術書であるヒポクラテス全集では癲癇(ἐπιληπτος)は季節性の流行病だと仮定されています。ただ、その原因も治療法も不明の病気のために、別名これを「神聖病」などと称して、神の仕業である、とする俗説もギリシャ語圏には根強くありました。ヒポクラテスの弟子達の代になると、この病気は親から受け継ぐ遺伝形質であり、脳にその原因があるとの仮説が生まれています。どちらも紀元前の学説です。一方、ユダヤ人はこれが不治の病であり、悪霊の仕業だと考えました。治療ではなく除霊以外に打つ手はないと。

20世紀の世界大戦の犠牲者を凌ぐ、空前絶後の死者を出してしまった新型コロナウイルス感染症は、その病原体がすぐに特定できてからも数ヵ月間、有効な手立てを講ずることができませんでした。今も昔も大病に即応できるのは神のみであることを、再び思い知らされます。

聖書の場面に戻りましょう。本来なら聾啞者や盲人は、本人や家族の方からはイエスに打診することもなく、自重して生来の不自由な状態に甘んじていました。けれども、発熱や激症をとまなうケースとなると家族や周囲の者たちの協力で、イエスとの面会が画策されます。当時の、依頼者側の自主規制の境界線はそこにあったようです。さて、除霊による

癒しを求めてきた病人の父親は最初、イエスの不在を知らされると、彼の弟子たちに癒しの業の代行を求めます。ところが叶いません。彼らは、先ず何よりも神に祈るという約束事を失念したままで、朧ろ気な記憶を遡り、過日のイエスの癒しの業の物真似をしていたようです。事実関係の報告を受けたイエスは、弟子たちと父親の不信仰を嘆かれました。さらに、この問題を解決に導くためには父なる神の協力が不可欠であることを伝えます。

すると、息子の症状が再び顕在化します。倒れて口から泡を吹き出し悶え苦しみはじめました。

混乱した父親は、息子ではなく「わたしども(息子の親族?)を憐れんで助けてください」とイエスにセガみます。彼らは息子の症状に遺伝形質が存在することは、考えてもみないのです。いや、たとえ知らなくとも誰よりも神の救いが必要なのは今、目の前で苦しんでいる息子自身のはずなのです。父親は加えてイエスに訴えます。「あなたが、何かできるのならばしてください」と。口下手が感受性の欠如からくるのか、親子関係に問題があるのか、それとも不信仰の証なのか、あるいはその全てなのか・・・、追求している場合ではないけれど・・・。息子ではなく「不信仰な私を救ってください」と、セガむ父親を、深く哀れみつつ、イエスは三重苦の彼の息子を、その苦しみから解放したのでした。

この癒しの出来事の直後のエピソードは、なぜかマタイ福音書にしか記されておりません。イエスが滞納していた神殿税を、ペトロの分まで一緒に納税するというお話です。イエスはエルサレム神殿のことを「自分の父の家(ルカ福音書2:49)」と語っていましたが、その父なる神が、子なるイエスに納税を求めておられるのか否かという疑問を呈したのが、他ならぬイエス御自身でした。同時代のローマ皇帝やユダヤの王家が、自分の子供たちに納税を強要することがあるのかどうかを、弟子のペトロに問うてみると、その答えは、「ありえない」というものでした。これは、ペトロでも答えられる、当時の常識でした。ならば、常識的に考えて行動することは、けっして反社会的な行動ではないはずであるとイエスは言いました。自分もそうすべきなのだと。けれども人類限定の常識が、神の現実と噛み合うのかどうか問題となるのです。

さて、イエスもペトロも納税そのものに反対する決定的な理由を見出

せません。そこで、納税に応じることになります。お金の出所はペトロがガリラヤ湖で捕獲した魚の口の中にあった硬貨です。その額は、二人分の神殿税に相当するものでした。主の山ならぬ湖に、不測の備えがありました。

ただ、真実は、預言者を通して語られているとおりで、主なる神は人間の家畜を屠って、これを食べて生きているわけではないのです。これと同じように人間の税金を当てにして生きているわけでもありません。つまり、納税の可否は専ら人間の側の問題なのです。神は天地創造にかかる費用の総額を計算して何処からか調達していたわけではありません。同様に、神の独り子が神殿に税を納める行為は、その父なる神との関係においては不可解な行為となるはずです。躓きは人の側にではなくむしろ神の側にこそありそうです。

ところが、西暦70年、第一次ユダヤ戦争が勃発します。世界最強のローマ軍の攻撃を受けたエルサレムとその神殿は、脆弱なユダヤの軍隊の力だけでは持ち堪える術もなく最強軍隊に破壊し尽くされました。その後、4つの福音書が順次、世に出た頃には、まだエルサレムの神殿もなければ、そこに納める税金も、自然消滅したままです。こうして、イエスの納税のエピソードそのものがもはや意味をなさなくなり、他の新約文書の編集記事としては割愛されたようです。その結果、この時にイエスが神殿税のことで、周囲のユダヤ人を躓かせることはなさらなかったという事実だけが、マタイ福音書には保存されているのです。

(cf. 皇帝への納税, 同福音書22:15-, 他)